
アウロボロス -円環大地交響詩-

est

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アウロボロス - 円環大地交響詩 -

【Nコード】

N3359L

【作者名】

est

【あらすじ】

——かつて六つの大陸には、それに呼応する六つの色彩が司っていた。水、風、火、大地、光、闇。互いに相食むように連なる円環の大地は、ある龍の名で呼ばれていた——魔法と剣が織りなすハードファンタジー。

ブローグ

我は剣。

生まれながらにして他の誰かを断つただけに呼吸する武装。

幾千の闘争を越え、血と屍の山河を築き。

それでも尚、歩みを止めることはない。

志半ばにして地に還った朋友がため。

明日を望みながらにして果てた朋友がため。

私は、進む。進み続ける。この先に何があるかと、歩みを止めることはない。

進み続けたその果て。血と屍の山河を超えた先。

朋友が見ること叶わずに果てた明日を見定め、土へと還るそのために。

断章 u

薄暗い密林の中に、響く音がある。

鳥か獣が見当さえつかない、得体の知れない何かの声。耳障りなまでに高らかなその声に隠れて、草木をかき分ける音が僅かにある。人の手が未だ及ばぬ地。歩みを進めるその人間は、——少女と呼ぶにも、幼すぎた。

背丈は恐らく、大人の腰ほどに満たない。身にまとう服は寒村によく見られる、みすばらしい檻襖^{ぼろ}。涙は既に流し尽くしたのか、少女の顔に浮かぶのは疲労の色と諦念の色だけだった。眼球を失った左の眼窩は痛々しげな赤色を乾かせ、乾いて砂のようになった泥と混じり褪せた色となって少女の顔を染めている。

残った片方の漆黒の瞳には、年相応の輝きもない。ただ踏み締めるべき足場を探し、行く末さえ知らぬ道なき道を歩き続けるのみ。道と呼べる道さえなく、周囲に生息する魔獣は極めて危険かつ強大。公に認められる冒険家でさえ探索の依頼を拒むとされる、この世界屈指の陸の孤島。獣が暮らし龍が息づく地だ。

少女が息絶えるのを今かと待つ鳥。少女の喉笛に狙いを定め息を潜める獣。しかし、その何れもがその機会を計れずにいる。

高く聳える大木に寄りかかり、息を荒げ。頭上を仰いで少女は何日が経ったのかを考えていた。

——三日だろうか、四日だろうか。恐らく五日は経っていないだろう。既に手足の感覚さえ薄れ始めている。これで意識がなくなれば、待ちわびている誰かの腹を満たすことになるのだろう。

木から身を離れた少女は足を引きずりつつも前へと歩く。だが、それを遮ったものがあつた。

轟音。そう呼ぶにしても、小さすぎた。爬虫類を思わせる巨大な足が木々と獣を踏み潰し、巨大な手は少女の細い体軀を握るようにして掴み上げた。

龍だ。恐れるべきものの代名詞でもある巨大な異形が、赤い眼で少女を見ていた。

龍は刃を思わせる、無数に並ぶ歯を見せた。笑っていた。何故ここにいる。喰われに来たのか。馬鹿と呼ぶにも値しない。まるでそう言っているようだった。

少女の表情はと言えば、恐怖にその顔を歪めることもなく、静かに龍を視るのみだった。

彼女は龍の知る人とは違っていた。人は龍を恐れ、それ故にその知の限りを駆使して龍に抗う為の術を編み、そして龍へ切先を向ける。神話の頃より続く、人と龍との関係だ。火薬を作り、魔法を編み上げ、鉄と火によって自らの住処を貪欲に広げる人間と、その少女はあまりに乖離していた。

魔法の恩恵を受けようと、鉄と火の力を手に入れようと、龍はおよそヒトにその爪や牙を本気で仕掛けることはなかった。長い悠久の歴史の中でそれほどまでに龍を追い詰めたのは《龍殺し》の名を与えられた聖人と、今の時代を生きる賢く気高き魔導のみ。

龍がその腕^{かいな}をだらりと下ろす。

『逃げる』

轟きと呼ぶべきであろう低音が木々の葉を震わせ、響く。

『逃げて見せる、人間。追いかける私から、お前を引き裂こうとするこの爪と牙から、逃げて見せる』

ただの余興にすぎない。生きる望みの糸を垂らせば、他の人間と同じく彼女も逃げるはず。竜はそう考えた。

「……どこに？」

少女の問いに、龍は戸惑った。低い唸り声でひとつの間をとり、

『どこへでも逃げればいいだろう』

「逃げる場所なんて、帰る場所なんてない。帰る場所を亡くしてしまった。だから私は待っているの」

『何を、だ』

哲人のような達観した顔で、狂人のような無の顔で、少女は言っ

「た。
——私が、死ぬのを」

第1話へ龍の少女

まどろみから醒めたばかりの頭を軽く振って、少女は目をこすりつつ前を見た。

火の手が上がる、人の営みの残骸。在るのは瓦礫と化した建物と、五体を叩き斬られた人間の一部だった。

立っているのは彼女だけだ。風貌は異質、異様と呼ぶ他ない。年の頃は十五にも満たないであろう大人の胸ほどもない上背に黒曜石を思わせる右の瞳。

本来ならば二つで一对となるであろう双眸というものを、彼女はどうか片方失ったらしい。左の額から頬にかけて広がる傷痕は表情を浮かべることなくひきつれ、傷の中心である左目は眼帯が覆っている。

左手に握るのは、彼女より明らかに大きい巨剣だ。大の大人の背で考えても一人と半分ほどはある、およそ振るうことなど不可能な物体を携えている。

その剣は旧い叙事詩の英雄の名と同じ《ザイフルート》。如何なるものをも断ち砕く、神秘や秘蹟に類似する神剣。

剣と呼ぶにはあまりに大きく、鉄塊と呼ぶには美しすぎた。神が為に作られた兵器たる、簡素ながらも完結された造形美によって輝く銀の至宝。たゆとう湖面のように風景を写す銀の刃に今は、赤い汚れがべつたりと貼りついていた。

頬についていた血を、少女は空いた右手で拭う。返り血を浴びたのはいつ以来だろうか。光皇国の衛兵と戦った時か、西の龍と戦った時か。どちらにしろ相当昔の話になる。剣をふるう最中、絶えず続いていた頭の痛みが剣を鈍らせたのだろうか。

少女は空を見上げた。紅蓮と紺碧を混ぜた半端な紫色が、鋭い山の峰に削られている。

円環により大地は成る。火、水、地、風、光、そして闇の六色に

分かれた大地が相食むように円環をなす。

光の大地として名高い光皇国の一集落——光の加護を受け、魔術と科学の恩恵に幸せを謳う人間の住処であったその場所も、少女の訪れによって屍と血の山河になり果てた。

誰が来るのだろうか。ふと浮かんだその想いに、少女は独り苦笑した。誰が来ようと何が来ようと、阻むのであればこの剣で斬り開くのみ。

——ああ、静かだ。

静けさだけが少女の中に響いていた。心地よくも悲しい無音に身を、心を委ね、巨剣を大地に突き立てた。夕の日が墓標のようにして突き立てられた巨剣に穏やかに降り注ぐ。

『またかウルスラ。無闇に人里を消すなと母様に言われたろう』
地を揺るがすような響きがその静寂をかき消した。それは、ウルスラと呼ばれた少女がもつとも気の置けない仲間として信頼する龍の声だった。

風車や大樹などといったものとは比べ物にならないほどの巨大な龍だ。尾の一薙ぎで一つの集落を叩き潰せるであろうその巨体の翼をゆつくりとはためかせ、少女の隣に降り立った。暴風に残骸が吹き飛ばされる中でも少女だけはまるで動じることもなく瞳を瞑っている。

「……………」

『ここは光の国の要衝だ、兵隊ごと潰されたと知ればすぐにでも大軍が押し寄せてくる』

円環を成す六つの国の中でも軍事力では飛び抜けた力を持つ光皇国は、その圧倒的な軍事力と秀でた技術力によってその領地を着々と増やしていた。人知及ばぬ未開の地を切り拓き、人に抗うモノを害獣と呼んで討ち滅ぼし、そうして繁栄を手に入れた国家だ。

その光皇国でも随一の力を持つ魔導は、強大な力と残忍さで名高い西の巨龍を一人で討ち取ったという。人一人が龍を、しかも一つの城塞をも凌ぐ大きさで知られる巨龍を討つなど御伽噺そのものに

他ならない。

いつしか相見えるときがくるのであれば、この剣で斬り伏せるのみ。これまでも立ち塞がるものはそうしてきたし、これからもそうなのだろう。そのことに疑問を抱いたことは一つもない。

弱さ故に人は抗う術を編み、そして他の全てを呑みこもうとする。弱さ故に少女はあの日、あの森で死んだ。

今ここに立つのは諸国からと呼ばれる小さな、しかし強き龍だ。吐息を吐くことも尾を薙ぐこともできないが、彼女には英雄の名を冠する剣と龍にも比肩する膂力がある。負ける道理などあるはずがない。その確信を察したように、巨龍はその目を空へと向ける。

『なるべく早く戻るんだぞ？ 遊びも過ぎれば群れの動きに差し支えるからな』

苦言を呈した巨龍はその翼を力強く羽ばたかせ、宵闇が滲みだす西の空へと飛んで行った。

忠告した巨龍の言った通り、数刻と経たずしてその地に降り立ったのは、鎧にその体躯を包んだ騎士達だった。

光輝く白銀の鎧に身を包んだ騎士だ。凄絶が広がるその焼け野が原において彼らは間違いない救いの手と言うべき存在だろう。だが、彼らが救うはずの誰かなど、とうの昔になくなっていった。

最初に拳がった声は誰のものだったのだろうか。怒りと使命感に燃え上がる力強い炎のような雄叫びが始まりの合図となった。

義憤であつた。自らがその武装をもつて守るべき、その命を賭して救うべき無辜の民草が、暴虐なる害獣に蹂躪されたのだ。容赦なく彼女に向けられた幾つもの殺意が、その事実の冷酷さを物語る。

関ときの声と共に、鋭い槍の穂先を少女に向けその楯を構える騎士達が素早く左右へと展開していった。統率されたその動きには一切の無駄もなく、無数の切先に捉えられた少女はものの数秒で完全に包囲された。

人が相手であるならば投降を呼びかけるだろう場面において、しかしその声はない。彼女は人ではないということ、騎士たちはよ

く理解していた。

諸国の中でも目覚ましい発展を遂げた光の国に根差す最大の害悪。幼き外見に反し、一にして百の兵を凌ぐ力を持つ怪物。人の姿でありながら害獣に指定された龍の化身。現に彼女の傍らに突き立つ巨剣にはべつたりと貼り付いた鮮血があり、彼女の足元には散らばった亡骸があるのだ。

死を以ても購うことは叶わぬ大罪を犯した咎人に、光の名の国が誇る白銀の武者達がその戦意を集中させる。

硬い足音と共に間合いが、敷き詰められた槍衾やりふすまによって詰められていく。どの穂先が彼女の柔らかい四肢を貫くのか。肌を裂き、臓腑を抉り、骨を断つのか。

不動を保っていた少女が動いた。巨剣の柄を握る左手に、力を込め。

力強い加速を得て少女は突撃した。

乾いた硬い大地に亀裂が走る。それほどの踏み切りによって得た加速と共に、少女は己が武装を薙いだ。

重い音が響く。義憤に駆られた戦士が、その無知ゆえに命を落とした音だ。がしゃ、という音は鎧を纏ったまま腹を真横に断ち切られた騎士の五体が、重力に従って焼けた土に転がった音だ。降り注ぐ赤い色彩の中、包囲の一端を破った少女はそのまま反転。

兜ごと頭を真つ二つにされた者。

ある者は槍持つ腕を落とされた。

ある者は足を失い地べたを這いずり回る。

痛みと恐怖に駆られ彼女と対峙する者も、抗うことの無意味を悟りその時を待つ者も、等しく彼女によって皆殺された。

「この……っ！」

絶望と驚愕に声音を震わせながらも、残った最後の一人が剣を高く振りかざす。

せめて一撃。この一撃さえ通れば、目の前の怪物を討ち取れる。

決死の覚悟は騎士の力を限界まで振り絞らせ、疾風の如き速さと雷

火の如き力強さをその一太刀に宿らせた。魔力の上乗せによりその威力を飛躍的に増した一閃だ。

仮に人が相手であれば、その一太刀を防ぐ手だてはなかっただろう。

少女は姿形はともかくとして、紛うことなく龍であった。そして、騎士の青年は龍殺しの聖人ではなかった。

無慈悲な、しかし苦痛を味わう間もないという意味ではこれ以上なく慈悲に溢れた一撃が、騎士の頭を叩き落とした。

ぶつりと糸の切れた人形のように、前のめりに倒れ込む。それきり、その男は動かなかった。最期の戦意とともに放つはずであった剣を大上段に構えた構えたまま。

そうして、その焼け野が原は静けさを取り戻す。

——淀みない静けさに満ちるその場所にあるのは有象無象の亡骸のみ。その全てを手に掛けた少女は、ただ、音を聞く。

高鳴ることのない心の臓腑が刻む音を。哀しげに響く風の音を。流れる赤色が大地へと還っていく音を。

人の生み出す煩わしい音を消す。それだけが少女の望みだった。強大な力を有する光の国に彼女が住処を選んだのも、もっとも音に満ちた場所であつたからだ。

人を滅ぼし静穏を取り戻す。その為だけに、少女は聖人の名を冠する巨剣を振るい続ける。

鼓膜に刻まれる規則正しい雑音を振り払うように、少女は西の空を見やった。

天上に座す無数の星は咎めるわけでもなく褒め称えるわけでもなく、ただウルスラを照らしていた。

酒場にて - 1 -

この場所においては、喧騒さえも心地よさに変わるのかもしれない。

そう考えながらグラスを傾ける一人の男の姿があった。

短い白髪に鷲鼻、彫りの深い顔。話しかけることすら躊躇ってしまふ、厳格な雰囲気を帯びた長身の初老の姿だ。漆黒の外套を羽織る異様な風貌が目を引きが、そんなことなどまるで介さずに琥珀色の液体が注がれたグラスを傾けながら、店の主であろう男に声を掛ける。

本来ならば水で割るなり氷を浮かべるなりして楽しむ酒だ。直接呑むのは勝負事や景気づけに限られる強い酒であるにも関わらず、平然とグラスを空にした男に驚愕する店主へ初老は、

「主人、黒髪の子供を見なかったか」

初老の言葉に店主は呆れたような軽い笑みを浮かべた。

「爺さん、あんた見ない顔だがここがどこだかわかるだろ。酒場にガキが一人で来るわけねえだろ？」

後ろから聞こえる揉め事の声を見殺しつ、初老は言葉を続ける。「もつともだ。では質問を変えよう、この辺りに変った獣を見たという話は？ 頭と尾を幾つも持つ化け物のような獣だ」

店主は再度苦笑した。そんなことも知らないのか、とで言いたげな表情で。

「ここに来るのは初めてか、爺さん」

ああ、とだけ初老は言葉を返す。言葉を次がなかったのは、店主の表情に怒りの色があつたからだ。

それは初老へと向けられたものではない。理不尽を振りまく獣へと矛先を向けた、怒りの色だ。

「キメラって言ってな、この辺りじゃ村一つなくなっちまうことだってある厄介なバケモンだよ。ただ力が強いだけならまだいいが、

厄介な連中は炎やら氷やら魔法まで使つてきやがる。ここ数年前にいきなり湧いて出てきて、今じゃあ報奨目当てのよそ者に退治を頼まねえとやっていけねえくらいだ——っておい！ テメエら店壊すんじゃない！ 聞いてんのか、ああ！？」

店主の文句が注がれる先に初老が目を向けると、大柄な男をねじ伏せる少女の姿があつた。店主の言う通り、並べられていた椅子や卓は真つ二つにされているものや脚を折られているものばかりであり、店の持ち主からすれば怒りを覚えても仕方がないだろう状態だ。初老は店主の言葉を反芻する。探し人はこちらには来ていないようではあるが、地の国にまで業の獣はその住処を広げていたようだ。自らがかつて犯した罪に、初老は僅かに表情を険しくした。あの時の過ちが、迷いが、今もこうして罪なき民草に被害をもたらしているのだ。

その時だった。

カウンターに置かれていたグラスが波を立てる。異質な気配を感じて振り向いた視線の先、初老の視界はその瞬間を捉えた。

強い音とともに店の外壁の一部が崩れ、そこから姿を顕わにしたのは巨狼の姿。ナイフのような鋭い牙が並んだ大顎を開け、獲物が詰まった酒場という名の餌箱を見つけたことに興奮しているようだった。

呆れたように溜息を一息つき、初老は店主に提案した。

「主人。——次はもう少し丈夫な作りの扉にした方がいい。いい腕の石工を私は知っている。あのような木の扉では壊してくれと言っているようなものだ」

「何ボケてるんだ爺さん！ 死にてえのか！？」

「ああ、そう言えば私の名はハンスという。爺さんなどと呼ばず名で呼んでくれぬか？」

食い違ふ会話の最中、つい先ほど男をねじ伏せた少女が腰に差していた獲物を抜き、獣へと華麗な剣戟を浴びせていた。

荒削りではあるものの、十分な滑らかさを感じさせる流麗な剣の

舞。自らへと迫る一撃一撃をその都度見極め、僅かに湾曲した刃でいなしながら的確な斬撃を放つ。良き師と多大な訓練によって練り上げられた技術だった。

それ故に、初老は齒痒さを覚えていた。速さと効率のみを極度に求めている少女の剣は、その完成度の高さ故に儚さを感じさせる。鍛え上げるのではなく削り上げることによって先鋭化させたことにより、不意の一撃への対処をほぼ度外視した剣になっていた。仮にそれがあの巨狼にも感じられていたならば、血を流して断末魔を挙げるのは獣ではなく少女だろう。

そんな初老の懸念を余所に、少女の放った突きが狼の目を串刺しにした。

激痛と片方の光を失ったことによる錯乱が、狼の生存本能を奮い立たせたのだろう。それまでにない膂力をもって薙ぎ払われた爪に少女は僅かに後ろへ下がり、その隙を見た狼が凄まじい勢いで外へと走っていく。

それが狼の犯した過ちだった。

霧散した。狼の体が、影形もなく弾け飛んだのだ。血肉によって地に産み落とされず、魔力によって造られた紛い物の末路である。巨大な体躯を構成していた名残であろう血が床に僅かにこびり付く。僅かにグラスに残っていた琥珀の液体を呷り、初老は店主へグラスを預けた。

「空になってしまった。次を注いでくれ」

「——ったく、終わったのか？」

「ああ」

カウンターの陰から恐る恐るといった風に様子を窺う店主は、安全を確認して深い嘆息をついた。

「命がいくつあっても足らねえな。ほら、酔い潰れて野垂れ死には勘弁してくれよ？」

狼を屠った少女と、その周りにいる何人かが言葉を交わしているようだった。声まで聞くことは喧騒の中でかなわなかったが、長身

の男が少年の首筋に鮮やかな当て身を入れて彼を抱え、その取り巻きが店を出て行くまでをハンスは観察。

元の喧騒を取り戻した酒場は、入口こそ壊されたものの問題なくその機能を持続させていた。

「——何なんだ、あの連中。あんな獣を軽く片付けるなんぞ、この辺りの顔にはいねえぞ？」

「さあ、それは私の知るところではない。それに主人、息つく暇など無いように思えるが」

「は？」

入口の扉がなくなり、その周囲の壁も砕かれたことにより外を見通せるようになったそこから見えるもの。

荒れ地の果てから濛々と上がる砂煙。紛れもなく、見間違えることなく。

大軍勢となつて押し寄せる獣たちの立てる砂煙だった。

足音とは思えぬ地響きが店を揺らす。逃げることの無意味さを知った客は、何事もなかったように憩いの時間を再開していた。

頭を抱えてうずくまった店主は、やがてへらへらと笑い出した。

「さて主人、ここで一つ交渉といこう。私は旅の者で路銀を近くの関で使い果たしてしまったのを忘れ、酒を呑んでいた」

「はっはっは、それがどうした。何なら店の酒全部開けてくか？」

「至極魅力的な提案ではあるが、憩いの場の主を死に追いやることは私の本意ではない。酒代を免じる代わりにあの群れを始末するか大人しく酒代を踏み倒されて酒代以外の全てをアレにこのまま踏み潰されるか。好きな方を選べ」

「やれるもんならやってみてくれ。俺はもう寝る、これはきつと夢だ」

言うなり酒瓶を枕にしてさめざめと泣き始めた店主を尻目に、一人ハンスは外へと出た。

酒場にて - 2 - (前書き)

某所にて投稿していたものを改稿した作品です。

酒場にて - 2 -

軍勢と、まさにそう呼ぶべき数だった。

降って湧いたのかと思うほどの数の群れ。絶望するには十分すぎる、視界の端から端までを覆い尽くす正に大軍と呼ぶべきその集まりを、ハンスは見る。

いかに軍政を強く敷く国家でないとはいえ、円環の一つを担う地沃国首都とは思えない数多くの獣たち。

ハンスが視界に捉えた巨獣の頭、その首筋には矢が突き立っていた。恐らくは前進を食い止めようとして何者かが放ったものなのだろうが、その程度で止められるほどに容易い相手ではない。個々の力に劣れども軍勢を成して襲いかかる獣の群れは、人の営みなど容易く踏み潰す。

ハンスが外套の懷から取り出したのは、子供が刃物の扱いを覚えるために使うような大きさのナイフだった。群をなす巨獣は愚か、一人の命を奪うのにも苦勞するような刃だ。ただその刃には、街の行商が売るようなものとは明らかに違う、細やかな意匠の施された業物だった。

その刃を片手に、嘲るような獣の雄叫びに耳を貸すことなく、ハンスは一つの行動を取る。

ナイフを、自らの左の掌に突き立てたのだ。

掌から手の甲にかけて貫かれた刃の銀が、鮮やかな赤に染められていく。ずるり、と糸を引くような粘性の音と共に刃を引き抜き、傷口が開く左の掌を握りしめる。痛みに顔をしかめることもなく赤色が滴る拳に力を込め、魔導師は「ちからあることば」を紡ぐ。

静かに、しかし深く響く力強いバリトンの詠唱。

「銀の王権が命ず。《極光》が眷属、光輝の剣能を顕せ」

ナイフを核にして、変容が起きる。

言葉を引き金として甲高い金属音が響き、溢れ出る血が重力に抗い、一つの輪郭——光輝く剣——を象っていく。

不敗の賢哲、銀の巨腕かいな、鉄血魔導。数多い異名と逸話の域にまで達する戦功で知られるハンス・フリープ・フォン・グナイゼナウの異名の由来、極光の剣の片鱗である。

刀身が外界に触れたと同時に、持ち主に確固たる勝利を約束する不敗の神剣。突如として瞬いたその光に、軍勢が低い唸り声を挙げる。警鐘を鳴らし始めた生存本能は、その元凶となる老人への攻撃を選択させる。

「恐怖を覚えて、なおも向かってくるか。ならば仕方あるまい」

短い最後通牒だった。

言葉を発すると同時に、ハンスは歩き出した。悠然と、十歩ほどもないであろう大群との距離を自ら狭めていく。

「死をもつて、牙剥く相手を違えたことを悔いるがいい」

荒野は、地獄と言う他ない一方的虐殺の光景へと変貌した。

ただ、始めからそうであったように獣であったはずのカチが細切れにされていく。魔力光を伴って次々と大気へ溶けていく異形だけが、ある。大蛇の尾が宙を舞い、虎の頭が鞠のように転がり、血が河となって地を潤していく。慈悲という感情を欠片も含まない一閃は、その一太刀で幾つもの命を亡骸に変えていく。亡骸の中央、立つ人影は滝のような返り血をその身に浴びた初老の姿。だが、その返り血さえも魔力光と共に消えていく。

滂沱たる光の中、最期の一体となった巨獣。その前に立つハンスが手に握る光の剣は、赤黒い血糊と魔力光の残滓にまみれていた。

其処に人の姿があったならば、間違いなく彼は鬼神か悪魔として畏れられたであろう。しかし、今此処にいるのは言葉を解さぬ哀れな獣のみ。

猛禽を思わせる鋭い眼光が、異形の巨獣を貫く。怒りの高ぶりではない、沈痛な色の目が、しかし必死させるという意志をもって貫

かれる。

「――すまぬ。我らが行いさえなければ生まれなかったはずの貴様らを殺すは、飽くまでも我らの勝手」

だが、という言葉でハンスの纏う空気が一変した。これから自らが奪う命への哀悼ではなく、多くの誰かを無差別に殺めた無秩序の怒りへ。

剣に込められた魔力が目を灼くほどの閃光を纏い、極彩色の燐光と共に放たれる。

音は、ない。ただ静寂の一音をもって巨獣の体は真横に分かたれ、光となり弾けて消える。

「怒りと怨嗟の矛先を、何も知らぬ民へと向けるのは許容できぬ。私が地獄に堕ちるその日を待っているがいい」

自嘲の色を含んだ苦い笑みと同時に、光の剣が霧散した。ハンスは未だ血が滴り、痛みの残る掌を強く握り締める。

あの獣に殺された者は、もっと大きな苦痛と共に死んでいったのだろう。自分がたった今葬った獣たちもまた、このような掌の傷なと比べ物にならない痛みと恐怖を抱え死んでいったのだろう。地獄に行き着いたならば、一体どれほどの者が彼へと矛先を向けるのだろう。この手にかけて何千何万という命の槍衾が一斉に自分の首を挙げようとするのだろう。

自らが触れた死に想うことはあれ、それに苦悩するほどハンスは若くない。彼は多くを救い、多くを見捨て、多くを淘汰してきた故にそれら全てを受け入れるのみ。今はただ前に、前へ、前へと進み、為すべきを為すのみ。

目を閉じ、ハンスは僅かに黙禱を捧げた。

外套で血を拭った拳を懷に納め、酒場へと戻る初老の腕は、溢れ出る淡い白銀の魔力光で揺らめいていた。

酒場にて - 3 -

その酒場は今日も盛況であった。

つい先日、害獣の大軍に取り囲まれながらも奇跡的に損害を出すことなく賑わいを見せるその店は酒と煙草の臭い、絶えぬ喧騒が続く。

先日その酒場を害獣の軍勢から守った老人が坐していた、店主の立ち位置に程近いカウンター席には、今日もまた見知らぬ客がいる。
「——で、何の用だ姉ちゃん。ここはメイドの来るところじゃねエ、王都のカフェにでも行ったらどうだ」

「お構いなく。マスター、ミルクを一杯」

怪訝な顔つきで店主は注文通り、ジョッキに注がれたミルクを差し出した。

少女だった。物腰の良さからして育ちはいいのだろうと店主は推測。だが、言葉遣い云々を抜きにしてもこんな酒場とは無縁な場所に住む人間だと店主はすでに結論していた。

その理由は、少女の服装に他ならない。

漆黒の布地に映えるフリルがあしらわれた白いエプロンドレスにホワイトブリム。旅人が持つような大きな鞆からして、主人を追って屋敷を飛び出してきた侍女ともいふべき格好だ。艶やかな赤毛は侍女としての職務のためであろうか、肩口で短く切り揃えられている。

ならず者も多きたむるするこの酒場においては身包み剥いでくれたとも言わんばかりの身なりの少女は、どことなく眠たげに言った。
「……お尋ねしたいことがあるのですが……」

おずおずと上目遣いで聞いてくる少女に、店主は気軽に頷いた。
だが、桜の花びらを思わせる可憐な唇から紡がれた言葉に、店主は思わず耳を疑った。

「——聞き間違いましたみたいだ、もう一回言ってくれ」

「このあたりの適当な盗賊、額のいい賞金首を教えてくださいませんか？」

喧騒が止んだ。

賞金首を探している。それはさほど珍しいことでもない。日夜新たな賞金首が現れては消え、腕に覚えのある冒険者が現れては消える。それは既に当り前に循環していくと、酒場に集う人間は知っているのだ。賞金首と冒険者のどちらが勝つのかは彼らの知ったところではない。

だが、彼女はどうか。どこからどう見たところで賞金稼ぎを営む冒険者にはとても見えない。それどころか、賞金首にさらわれて身代金を要求される人質と言った方がしっくりくる。

「教えてやるよ嬢ちゃん」

熊を思わせる大男が下卑た笑いと共に、少女の隣に座った。酒場の客がざわめく。

赤銅色のプレートメイルを巨体に纏う大男――籠手には隻眼の熊を象った紋章が刻まれている。豪商の子息を人質に取ったことで得た巨万の富をもとに肥大化し、現在ではこの地方でも指折りの大金を懸けられる盗賊の印だ。

「……臭いますわ」

恐怖と言う感情が欠落しているのか。それが店の主人の率直な感想だった。たった一言で男の形相を怒りに塗り替えた少女はグラスに並々と注がれたミルクをちびちびと味わっているだけで、何の意も介さない様子なのだから。

男が少女の胸倉を掴み上げた。物事の分別がつかない子どもならばまだしも、少女は盗賊相手に波風立てればどのようなことになるのかを知っていて当然の歳に見える。凍りついた空気の中、少女はやはり恐怖の一かけらも抱いていない。ただ、呆れた風に溜息をつくだけだ。

「テメエ、誰に向かって何ホザいてんのかわかってんのか？ ああ？」

「口も臭いし手もイカ臭い。最低ですわね、鼻が曲がってしまします。」

次の瞬間。店主は目を疑った。

自分の胸倉をつかむ男の腕に手を置いたと思った直後。

枯れ枝を折るような音と共に男の体が浮き上がり、カウンターへと叩きつけたのだ。

丈夫な木材で作られているはずのカウンターにめり込んだ男は抵抗することもできず、ぴくりとも動かない。

手首を掴み、捻りながら男の体を持ち上げ、叩きつけたという単純な動作。だが、小柄な少女が男一人を小枝のように持ち上げたという奇天烈な事実を観衆は度肝を抜かれていた。

「この侍女服は先代から授かった大切なもの。どこの馬の骨ともわからない下種に触ってほしくないものですわ」

怒声と同時に、酒場にいた数人の男たちが少女を取り囲んだ。手に持つのは刃渡りこそ短いもののその刃を光らせるナイフや短剣。一突きでも場所が悪ければ死に至る紛れもない凶器だ。

背後からの突進に、少女はそれをいなすようにくりと一回転。ついで真正面から迫る薙ぎ払いを軽く後ろに下がって避け、左右同時に放たれた突きを、

「——三流、いえ、三流でもないですわね。この程度で賊を名乗るなんて恥知らずもいいところですよ」

両腕を交差させ、人差し指と親指で枝でもつまむように切先を白刃取り。そしてそのまま二人を振り回すようにして投げ飛ばした。

必死の形相で四方八方から襲いかかる男たちとは対照的に、少女はそれこそ舞うような流れる動きで翻弄する。向けられる刃に対しては宙を舞う羽毛の如く軽やかに避け、放つ一撃は鋭く男たちに突き刺さる。

手拳は剃刀、足はさながら戈のよう。それでいて迫る脅威には柳

を思わせる滑らかな拳動で悉くを避けるその様は、間違いなく武人のそれであつた。

「このガキ——ッ！」

逆上と共に掴みかかる男に少女は軽く苦笑した。

襟ぐりを掴もうと伸ばされた手は、しかし左の蹴撃で叩き落とされる。

苦悶の呻きで僅かに体をのけ反らせたのが男の最大の過ちだった。蹴り足を鋭く引き、軸足にすることで勢いを倍加させた後ろ蹴りが、男の肩に直撃。

騎兵の突撃を思わせる速度と重量感が載せられた一撃だ。

放り投げられた人形のように吹き飛んだ男の五体がカウンター奥の酒棚に叩きつけられ、瓶の割れる音と酒の匂いが店内に充満していく。

「……さて、次はあなたの番ですよ？」

残心を残したままの少女が瞳を向けた先には、血相を変えた大男が立っていた。まさかこんな女が——自分の胸にも届かないような女が大の男を粉碎したのだ。

「……お、おおオオオオオオオッッ！」

腰に差していた短剣を逆手に構え、決死の形相で襲いかかる男。退路を断たれた者に特有な、前しか見ていない突撃だ。しかし、その速度は速い。先のもみ合いとは一線を画した、しっかりとした攻撃だ。

だが、少女は軽く苦笑。

風を切る音と共に迫る刃に少女は僅かに半身ずらし、凶刃を回避。そして、軽やかな跳躍と共に天へと掲げられた右の踵を、男の脳天へ振り抜く。みしり、という湿った亀裂音。

踵の直撃によって砲弾の如き初速を得た男の頭が床板に叩きつけられたところで男の意識は切断された。

だが、勢いをまるで殺さないまま下へと振り抜かれた鉄槌は男の頭ごと、檜で作られた丈夫な床板を薄い氷のように突き破る。

ずんぐりとした下半身が床から生えているような滑稽な図ではあったが、その光景がどのように生まれたのかを知る者は戦慄する他ない。銅で作られた兜が無残にひしゃげて転がっている有様が、彼女の蹴撃の威力を忠実に物語っている。

地獄絵図と化した酒場を一瞥して、少女はミルクの注がれたジョッキに手を伸ばした。

「子どもの盗賊ごっこでも、もう少し真剣にやり取りをするものですわ」

だが、それを遮るものがある。店主の手が、ジョッキを少女から遠ざけたのだ。

「——あの爺さんと言ひ嬢ちゃんと言ひ、最近ここに来る新顔は口くな奴がいねエ。ここに店を構えてもうすぐ20年になるが、こう短い間に店がぶっ壊れるのは今までにねえことだ……」

苦悶にひくつくこめかみを押さえて呟く店主に、少女はさも心外だという口調で自らの手荷物を顎で示す。

「ただ手足を使っただけで、コレを抜かなかったんですのよ？」

その先にあつたのは、淡く艶めいた月草色の鞘に納められた一振りの刀。華美な装飾のない堅実な威風を備えた業物だ。

店主は青ざめた。素手でここまでやってくれたのだ。もしもこの得物を振り回していたなら、どの首が床に転がっていたか知れたことではない。

「さて、マスター。つかぬことをお聞きますが、背の高い御老人を見かけませんでしたか？ 黒い外套と険しい表情でお酒をたくさん飲んでいたと思うのですが」

「ああ、グナイゼナウの爺さんか」

店主の口からごく自然に出てきた探し人の名。驚愕に表情を染めた少女は、先のチンピラへと向けられたのとほとんど変わらない速度で店主の襟を掴み、

「マスター、どこでその名を？ 答えによっては貴方の頭が鞠みたいに床に転がりますわよ？」

「じ、爺さんが自分で名乗ったんだよ！ キメラの大軍が押し寄せてきた後、山の向こうの山賊を討つてことで一人で歩いて言った！ 手エ離せコラ！ 苦しいじゃねえか！」

山賊ですか？ というさぞ辟易としたような少女の問いに、店主は言葉を付け足した。

「大体グナイゼナウって言ったら光の国じゃあ指折りの軍人だろ？ 嬢ちゃんはその軍人の娘か何か？」

「いいえ。現当主であらせられますハンス・フィリップ・フォン・グナイゼナウ様の家令を勤めておりますイリユーシ・アウフシュナイターです」

若かった頃にハンスの副官であった先代家令のヨハン・アウフシュナイターに拾われた好運な娘。それがイリユーシだ。極めて高い『素質』に恵まれた彼女は幼いころから二人の武に薰陶を受け、今では並みの冒険者を超える戦闘力を有する魔法使いとなっている。

だが、魔法使いという言葉が適当なのかどうか。それは誰もが疑問に思うものだった。徒手格闘に特化した身体強化の魔法と防禦結界、そして加護の力を有する大業物による至近距離での戦いのみに血路を見出す様は、魔法使いと言う語感からはあまりにもかけ離れている。

「ご当主様のことです。暇つぶしがてらに賞金首を適当にひねりながらその辺りをうろついているのではないかと思っていたのですが……」

「アンタさりげなく結構失礼なこと言ってるな。まあいい。その山賊だが、皇国に属しながら反旗を翻して半年、潰されないまま今も勢いを保ってる数少ない連中だ。懸けられた金も半端じゃねえが、長をやってる奴も冒険者をガキ扱いするくれえの化け物らしい」

民衆の蜂起として対処するために軍を結成しても相手は散発する遊撃的な勢力のため、少数精鋭となる冒険者への依頼が得策という判断なのだろう。軍の運用費の一部をそのまま懸賞金にしていることから金額も弾み、更には皇国から役職を与えられる可能性も望め

る為に志願する者は後を絶たない。

志願者が押し寄せる半年の間、その盗賊は滅ぼされるどころかその勢いを増しつつある。軍の戦力を盗賊の制圧の為に割くよりも、国内の腕に覚えがある者に解決を求める方が何かと都合がいいのだらう。

だが、それがハンスの出奔と何の関係があるのか。イリユーシの疑問はそこにあった。護国鎮府卿という名誉職に近い権力のない役職でありながら、皇国の中でハンスの人望は極めて篤いまだ。それが今の王とその周囲から好ましく思われていないのも少女は理解していた。だからこそ、辺境への出奔という付け込まれるような行動を取るハンスの考えがイリユーシにはわからなかった。

「頭目の名前はイスラファル。人狼と人間のハーフらしいだが、始めてしばらく経つのに人間の賊をよくまとめて今も勢いを伸ばしてやがる」

異民族系の名前だ。恐らくは皇国への併合を拒み、抗戦を保ち続けた少数部族の出だらう。夜空の星ほどに多くあった部族を力で統一した今となつては僅かにしか残らない、前時代の遺産だ。

抗い続ける者が次々と消えていく中で、生き残った者たちは独自の技術を手に入れ、それを子から孫へと受け継がせているという。特に人狼と人間のハーフという今の頭目は、異種族間での交流が抵抗なくその部族の中で広がっているということの象徴なのかもしれない。

「人間の血が濃いのか傍目から見ればガタイのいい山賊にしか見えねえそうだ。実際に出くわした冒険者の話じゃあ林に生えてるでっけえ木を花の茎みたくポキポキ折りながら蹴散らされたって話で、馬鹿力の方は人狼譲りってことだらうな。近場には最近小型の竜も見られるらしい、生半可な装備で行くのは死に行くのと同じだぜ？」

イリユーシは軽く笑った。

「その程度で死に行く？ その程度の場所が死地なのですか？

急ぎ発ちます、お話ありがとうございました」

問答無用と言わんばかりに酒場を飛び出そうと立ちあがったイリユーシの両肩を、店主はがっしりと五指で掴む。

面喰った様子のイリユーシに店主は、

「俺も連れてけ嬢ちゃん。一人の護衛くれえ楽なもんだろ、爺さんと嬢ちゃんにはキツチリ話つけとかねえといけねえからな」

「……ご当主様に、何か用が？」

「確かにキメラを片付けてくれりゃあ酒代は見逃すって言った。――言っただが、店の酒樽全部を空にしるとは言ってねえ！　つーか人間の胃袋にあんな量の酒が入るのか？　王都からの仕入れは毎日つてわけでもねえのに、在庫がなくなつたおかげで数日は店を畳む羽目になつたんだぞ！　おかげで店は大赤字だ！」

蒸留酒と水は似たようなものだ。そんなことを言いながら屋敷のブランドーの樽を全て空にしたことをイリユーシは思い出した。酒に関してはザルどころか、ザルの木杵と言うべき強さを誇る猛者だ。酒代を見逃すという台詞はそのまま、その店の店主が首を吊るのとなして変わらぬ意味を持つ。普通なら命が助かったのだから酒代くらい見逃せと言うのだろうが、この場合はそうも言いきれない。

熟考の末、イリユーシは渋々首肯する。酒代は屋敷に戻ればすぐに払うことが可能だが、あいにく屋敷にすぐ戻るつもりは毛頭ない。だが酒代を踏み倒すというのは皇国の守護者として名高いハンスの榮譽に傷がつくことであり、精算を済ませるべきだろう。

「わかりました。では、その盗賊の首に掛けられた賞金を弁済へと充てましょう」

「必ず戻ってくるんだろうな？」

「いえ、同行していただけないのなら、その保証はありませんね。ご心配なさらなくても身の安全は私が保障しますわ、マスター」

口をあんぐり開けたままのマスターを見て、イリユーシはそう言った。

「さあ、参りましょう。賞金首の賞金を狙う以上、他に先を越され

ては意味がありません」

酒場にて - 3 - (後書き)

ごきげんよう、e s tでございます。今回は酒場でのお話の第3部分をお届けします。

なんかエライ爺さんとやたら強い無愛想な女の子と二人のキャラにやや圧されるメイドが絡むファンタジーとなっております。たぶん。

一番かわいそうなのは店の酒を飲み干された揚句、よくわからない内に鉄火場に巻きこまれるマスターなのでしょうがメイドさんと一緒なので多分大丈夫でしょう。

次回はハンスとウルスラの出会いから。感想、応援、力になります。

密林の中の獣道。鬱蒼と茂る木々の葉を掻き分けて進む初老の姿がある。

湿度が高く気温も高い、体力を奪っていく密林の気候。更には小型から大型まで多々ある害獣も多く頻出する、冒険者殺しとも呼ばれる密林。光皇国がその軍事力をもつてしても、未だに未開のまま保たれるその地に初老はいた。

短い白髪に鷲鼻、彫りの深い顔。額に汗の一つもかかず、険しい双眸は無秩序に生い茂った濃い緑へ注がれている。

——過去から見ても植生が変わっている、か。

自らの持つ記憶と今の森を、初老は照らし合わせていた。過去に自分がこの地に入った時にもここは木々が群生する密林ではあったが、ここまで人間に害を及ぼす獣で溢れているということはなかった。森の周辺には幾つかの集落も存在していたし、その集落から本国へ納められる密林の果実や毛皮などは交易の上でも強い力を握っていたのだ。

だが、ここ数年のうちにその集落は一つを残して全て消滅した。キメラと呼ばれる害獣の増殖とも、集落同士の衝突とも伝えられているが真相は定かではない。現在残るのは皇国に公然と反旗を翻す若き半人狼を頭目とする山賊のみだ。

その山賊のアジトへ、初老——ハンス・フィリップ・フォン・グナイゼナウは歩みを進めていた。かれこれ三日は休まず歩いているが、その中で出くわした害獣の数はもう一日目にして数えるのをやめていた。屋敷に帰って家令の少女に武勇伝を聞かせても意味はないだろうし、多くを討ち取ったところで何かが変わるわけでもない。枯れ枝を踏み折り、落ち葉を踏み締め、無数の音の中でハンスは——背後を振りむいた。

殺意。単眼巨鬼が裸足で逃げ出すような、龍の気配。害獣と言う

矮小な響きから最も離れた場所に立つ、空と地の覇者たる王者。

しかし、山とさほど変わらぬ巨躯は、そこにはない。可憐とも言えよう一人の少女の姿しか、そこにはない。

雪を思わせる白い肌の多くを露わにした軽鎧と、その小柄な体躯からどう放たれるのか想像もつかぬ巨大な剣。

ハンスは確信する。目の前の少女から放たれる殺意は巨龍のそれと、何ら変わらぬ鋭利なもの。少女の形をした龍だと、そう考えて何の差し支えもない。

右手には大人の背丈二人分とも思えるほどの巨剣を握り、左手にはその剣で刎ねたのだろう首が三つ、顎を大きくあけてぶら下がっている。

「……貴方も、賞金首の盗賊？ それともこの盗賊を追ってきた冒険者？」

問いに意味はない。そうハンスは直感していた。目の前の《アレ》は問いの有無に関係なく、平等に皆殺す狂戦士^{オーガ}なのだ。

ヒトがアレに出くわそうものなら、災厄に見舞われたのだとその命を諦める他選択肢はない。

だが、彼は。

極光と呼ばれし初老は、もはや人と呼ぶべきではない。

「通りすがりの魔導師だ。皇国に仇名す輩を直接この目で見定めるため、先を急いでいる最中でな。お主はどうやら賞金稼ぎではないようだが？」

余裕ある笑みを浮かべ、肩をすくめたハンスの言葉に、少女も笑みを返して答えた。だが、その笑みは美しく、そしてそれを遥かに上回って獰猛な笑みだった。空腹の末にようやく獲物と巡り合えた獅子のような、渴ききつた凄惨な笑みだった。

「一撃を受けて生きていれば、答えてあげるわ」

同時。少女はその手に持つ首を投げつける。

体を軽く右にずらした回避の直後、鉄塊とも思える巨剣が、神速をもってハンスへ叩き込まれた。

一撃の重みに、ハンスは口端を吊り上げた。

突如として放たれた神速の逆袈裟。四半秒にも満たぬ瞬間と呼ぶべき間に展開した眩い白の幾何学模様——六層の防禦結界を、五層目まで抜く一撃だ。盗賊はおろか、天位の冒険者でも手傷を負うだろう攻撃の質。一枚が城塞都市一つの防禦力を持つと謳われた堅固な結界が、ただの一撃で五層を貫通した。

その一撃を構成するのは、少女が持つ龍に等しき強大な膂力と、彼女が担う巨剣。

ザイフルト。龍殺しの聖人の名を冠する、光皇国の聖剣の一振り。ただの一薙ぎで山を削り、天を裂き、地を砕く破壊の神剣。護国の英雄が死した時、《彼女》の亡骸と共に埋葬されたはずの奇跡の残り香だ。

「約束通り問おう——名を聞かせよ。それとも、龍の姫君たる者が約束を反故にするか？」

その威力にハンスは確信する。彼女こそが皇帝の治める皇国において最も恐るべき——そして除くべき業敵、《龍姫》の名を戴く害獣なのだ。

だが、名を聞いたのはハンスの武人としての矜持の問題だった。如何に皇国に仇為す存在であろうとその武の強大さに偽りはない。ただ、進むべき道が違うのみ。卓越したその武は、讃えられて然るべきだろう。

驚の一色に表情を変えた少女は、しかしすぐに歳相応という言葉からかけ離れた静かな表情でハンスを見、

「——ウルスラ」

「うむ、良き名だ。してウルスラとやら。これほどの武を持ちながら、何故その刃を力なき民に向ける？ 空と地の覇者たる龍の娘の行いとして、これほど見苦しいこともあるまい」

「関係ない。殺して殺して殺し尽くすだけ。次はその口が利けないようにしてやる」

言葉は尽くした。そう言うかのような強い口調で少女は会話を断ち切った。そのまま大剣を大上段に構え、射殺すほどの鋭い眸でハンスを捉える。

つい先ほどの剣は戯れに過ぎない。言葉はなくとも、彼女の気迫がそう雄弁に語っている。

ハンスが覚えたのは、彼が忘れて久しかった戦闘への昂揚だった。城壁を超える堅固な結界は彼から危機感を奪い、軍勢を凌ぐ強力な魔法は彼から剣戟の交わりを奪った。その何れをも、少女は間違いない満たせる。熟練の域に達した技術はなくとも、聖人の名を持つ剣と龍にも劣らぬ力が彼の武を呼び覚ましたのだ。

「ウルスラ、幼くも気高き龍の姫よ。お主の刃では私は斬れぬ。確かにその刃は地を砕くことも天を裂くことも出来よう」

だが、という前置きの言葉と同時に、ハンスは自らの首筋を親指で軽く叩いた。

「——この老骨の首は、そう簡単には落とせぬぞ？」

言葉に偽りが無いことを、少女——ウルスラは本能的に理解していた。両の腕から体幹、両脚に魔力を集束させ、自らの身体が出す全力に身体自体が耐えられるよう強化の魔法を施していく。陽炎の如く揺らめく白い光の中に立つウルスラが握る巨剣が、その刃を鈍く輝かせる。必死させる、そう語る目はどこまでも澄み切って美しい。

彼女がその隻眼に捉える初老——ハンスは懷からナイフを取り出し、迷うことなく掌へと突き立てた。

溢れ出る命の赤色ごとナイフの刃を握りしめ、

「銀の王権が命ず。《極光》が眷属、光輝の剣能を顕せ」

確かな言の葉の紡ぎが、彼を不敗の賢哲たらしめる一振りの剣を頭す。先のおどけた口ぶりからは考えられないほどの、威風溢れる凄まじい魔力。並みの魔物であるならその余波だけで消えても不思議ではない。

動いたのはウルスラだった。

踏み出した一步。踏み締めたその一步が、彼女と彼女の剣を巨大な砲弾へと変貌させた。

音速を超過した速度で首筋へ吸い込まれるように放たれた一閃。ハンスが受けの構えで光輝の剣を構え、その刃に巨剣が叩き込まれる。

音と光の轟きが森と其処に住む生き物を殺さんばかりに溢れかえった。鬱蒼と生い茂っていた木々が風圧で薙ぎ倒される。だが、ウルスラは止まらない。

体を軸にし、ハンスが刃を受けた勢いを得て、逆回転の一撃を放つ。左から首を落とす薙ぎ払いだ。

一撃で全ての敵を仕留めてきた彼女が放つ、初めての二の太刀。だが、最初の一撃よりも速度を得たその剣は、もはや振るうウルスラ自身ですら想像がつかない。

二撃目。剣を構えなおす余裕もなかったのだろう、魔力光の飛沫が上がる。剣が大気を叩く音は更に大きく轟き、周りの世界全てが死んでしまったように静けさの中へと落ちる。

間違いなく、これまで彼女が出遭った中で最強の魔導師だった。

二の太刀を放つということは、彼女にとってそれほど大きい意味を持っていたのだ。

だが。

だが、しかし。

「——ッ！！？」

剣が、動かない。彼女の身体の一部とも言うべき剣が、動かない。何者かに掴まれている。

刃を、巨剣の刃を、皺のある大きな右手が掴んでいた。

受け止めたのだ。鋼にも勝る龍の肌を斬り裂く神の刃を、——ただの手のひらで。出来の悪い冗談のような光景であり、しかしそれは紛れもなく現実の光景であった。

「……何故、この剣が私を斬れぬかわかるか」

極めて低い、諭すような声を拒むようにウルスラは両手に力を込める。それでもなお、ハンスの手のひらはしっかりと刃を握りしめている。

手のひらからは赤い血が滲み、無事ではないことが分かる。だが、こうして言葉を投げかけるほどに目の前の老人は健在なのだ。刃と手のひらの接触面からは膨大な魔力光が滂沱として溢れ、ザイフルートの刃としての機能を完全に殺している。

「迅く、しかし重い、良き剣撃に違いはない。だが、それだけだ。こうしてお主の刃を止めるものと対峙し、現にお主は何も出来まい」無造作に放り投げるようにして、ハンスは刃を手放す。そして、

「だが、迷いなく放たれた良き剣であった。返礼を致そう」

左の手に携える光輝の剣を両手に持ち、上段へ構えなおす。防禦の一切を考えから外した、攻撃のみに特化させた構え。

どこから剣を放ったところで、あの構えから防ぐことは不可能。そう理解しているはずのウルスラの身体は、しかし動かなかった。手が、震えた。恐怖していたのだ。間違いなく、あの目前に立つ初老の男を。如何なるモノをも断ち切ってきたこの剣を、ただの手のひらで受け止めたあの男を。心の底から恐怖していたのだ。

「——《疾れ、極光》」

超重量の巨剣を木の葉のように振り払い、初老はその手に持つ光剣を振り抜いた。

剣先が描く軌跡と共に描かれる眩い白の魔力光。そしてそれは、全てを焼き払う瀑布となつてウルスラへと殺到する。

森ひとつを容易く焼き払う、超大規模の斬撃魔法。弾かれたザイフルートを地に突き立て、盾のようにして魔力波を防ごうとも、防禦の上から容赦なく超高熱の魔力波が肌を灼く。

背後へと続く森の全てが一瞬で灰へと姿を変え、その爆轟の中でウルスラはしかし生きていた。

「……ッ！」

だが、

「この微風^{そよかぜ}にも立ち向かえぬか。——ならば何故、龍を名乗る！」

厳然と、無慈悲に響くバリトンと共に初老が彼女の眼前に立つ。

脇に構えた光の剣——神々しい輝きを放つその剣は、間違いなく彼女を捉えている。

直後。

真上から振り抜かれた一閃と共に、ウルスラの意識は闇へと放り出された。

邂逅 - b -

彼女は恐れを抱いたことがなかった。

身を苛む痛みも、肌に深く刻み込まれる傷も、彼女を屈服させるには足りなすぎた。

それは、彼女が敗北を知らなかったが故のこと。

彼女を龍たらしめた、母たる龍との出会いの日から、彼女は恐怖という感情をその胸に抱いたことは、ただの一度もなかったのだ。

そんな彼女が初めて得た、死の恐怖。与えた魔導は《極光》の名を冠する老人だった。龍にも劣らぬ威風と、龍をも凌駕する力を持つ男だった。

引きずるようにして進める足取りに力はない。龍の姫君との名で呼ばれ、円環を成す諸国から畏怖された害獣とはとても思えぬ有様だ。

龍を名乗るに値しない。そのように宣言した低い声がウルスラの耳から離れることはない。光を待らせ容易く自分を死の淵に叩き落とした、あの老人の言葉だ。血の喪失によって冷たくなっていく体とは対照的に、胸の奥には老人への復讐の炎が強く燃え上がっていた。

自分は龍だ。誰もが認める力があり、誰もが恐れる力があり、そして円環を成す国は彼女を龍の姫君と呼ぶ。それを認めないのはあの男だけ。

その時だった。

「ッ——あ？」

間の抜けた声と同時に、口から零れたのは一筋の赤い滴りだった。胸元から突如として生えた、とある異物にウルスラは目を見開いた。

矢。赤く濡れた透明な矢が、彼女の胸を背中から深く貫いていた。「やっぱ神様ってのはいるもんだ。手負いの龍姫を俺に仕留めさせ

てくれるなんてよ！」

耳障りな下卑た笑い声さえ耳に入らないほどの激痛にウルスは苦悶の表情を浮かべた。背中に手を回し、矢を強く握り締めた彼女は無造作に矢を引き抜いた。ぶつり、という音の連続と共に矢尻の返しが肉を抉るにも関わらず、その表情は僅かに歪むだけだ。地に投げ捨てられた弓矢が、魔力を失って水に還り、土に吸い込まれていく。

前方に跳躍しながら身を翻し、矢傷を与えた者の顔をウルスは捉える。中背のやや年老いた魔術師と、その男の前で剣を構える若い男だ。

胸から脈に合わせるように流れ出る赤い色が、彼女の体を濡らしていく。誰の目から見ても相当な深手だ。

「親父、やっぱりやめよう。手負いだっていつでもあんな身のこなしだぜ、勝てるわけないよ」

「放っておけば死ぬようなメスガキ一匹に何ビビってんだ！」

強い罵りと同時、詠唱が紡がれる。

「《水の精霊、清き流れを司る美しき女神よ。濁りを生む邪な者を貫く矢となれ》——！」

巨剣は携えたまま、彼女はふらりとたたらを踏む。僅かに半歩、真横に身体を揺らすことで飛来する水の矢を回避。

携えていた巨剣も、今では彼女の速度を奪う足枷に他ならない。だが、それでも彼女は剣を手放そうとはしない。

次の矢を矢筒から抜いた射手の男が、少女に狙いを定めた。その直前に飛び出した剣士が、真正面からウルスに斬りかかった。

傷さえなければ、剣士の行いは狂気の沙汰以外何物でもない。素手で刃を弾き、剣圧だけで人を消し飛ばす小さな龍を相手に剣で挑むという判断自体が大きな誤りだ。

だが、既に傷を負った彼女は年相応の少女に他ならない。大上段から振り下ろされた剣の一撃も、その後方から迫る水の矢も、彼女を確実に死に至らしめる。

その時だった。

「——遅いね。まるでのろまだ、蠅もあくびをするんじゃないかな」
飄々とした声が金属音と重なった。金髪の青年が、頭に金属の輪が数個ついた杖で剣士の一撃を受け止めていた。

渾身の一振りを受け止められた剣士の体が衝撃に軋む。その刹那、青年が繰り出した蹴りが剣士を突き飛ばした。

だが、それと重なるようにして襲いかかる矢の雨。これまでとは違う、大量の矢が青年とウルスを貫かんと降り懸かる。

「水の矢、なかなか見事な術式だが——」

納めた青年が、杖を握っていない左の手で印を結ぶ。

そして、

「——《土剋水》」

全ての矢が巨大な重力を受けたかのように、青年の足元に突き立った。数秒の間もなく矢は魔力を失い、水となって消えていく。

「土は清らかな流れに濁りをもたらす。幸いここは土の上、そんなちっけな水じゃあここの土を押し流すことなんか出来ないよ？」
「うるせえッ！」

激昂の声と共に、魔術師の両腕に淡い光が灯り始めた。魔力を集束させ、更に強力な魔術を放つための予備動作だ。

だが、そんな隙を見逃す青年ではない。

懷から青年が取り出したのは、金色に輝く小さな刃物だった。中央の柄の上下から伸びる刃と、細かな彫刻の施された装飾品のような外観だ。

「独鉗ひとりくわよ！」

青年の放った刃が不自然なまでの加速を得て、魔術師と剣士の手の甲と両足に突き立った。

独鉗と呼ばれた武器が、甲高い音を響かせた。音の響きが生んだ淡い光が凄まじい速度でその鋭さを倍加させていき、一瞬で雷鳴にも似た光となり剣士と魔術師を飲み込んだ。

数秒で収まった光の残滓の中、二人の男が崩れ落ちるように膝を

ついた。

その様子を確認した青年が、ウルスラへと歩み寄る。杖の輪が立
てる鈴のような音が、彼女の鼓膜に響き渡る。

「災難だったね。まさかあんな連中がつかかってくるとは……竜
の名を背負うのも楽じゃないみたいだ」

そう言って青年が手を差し出してきた。

「立てるか？ 近くに人狼ルウ・ガルの集落があるから、そこでひとまず話
を聞こう」

青年の表情は穏やかで、嘘をついているようには見えない。だが
所詮、到底信じることなどできるはずもない人間の言葉だ。青年の
言うままについていって、傷が癒える保証などどこにもありはしな
い。

残る僅かな力で、ウルスラは青年の手をはたいた。音が立つほど
でもないささやかな、しかりはつきりとした拒絶の行動。ここで誰
の助けも得ず朽ち果てることこそ、龍としての最期の誇りだと彼女
は考えていた。

「……仕方ない、失礼するよ」

青年がしゃがんでウルスラに視線を合わせたかと思うと、真正面
から彼女の体を抱きかかえた。横抱き——新郎が新婦にするような、
いわゆるお姫様だったことという抱き方だ。

不意に自分の体が持ち上がった感覚の直後には、青年の顔とウル
スラの目はすでに正しく目と鼻の先というべき距離にあった。何と
か抵抗しようと試みるものの、既に手足も動かない。助けられるく
らいなら死んだ方がマシだと舌を噛み切ろうにも、そんな力さえ残
っていない。身体の重みが頂点に達し、視界が隅から少しずつ黒を
広げている。

「眠ったほうがいい。眠りにつけば傷も塞がるだろう？」

なす術もない状況のまま見上げた、なぜか機嫌のいいような笑み
を浮かべた青年の表情が、ウルスラの最後の記憶だった。

邂逅 - b - (後書き)

少しずつメインキャストを揃えていきたいと思います。
執筆する時間がもう少し欲しいorz

「今からお前は人ではない。私たちと同じ、竜だ。翼は無くとも、お前には大地を速く駆ける足がある。爪が無くとも、お前には爪より恐ろしい剣がある。そしてお前には、竜としての誇りがある」

「けれど母様、みんながあたしを人と呼ぶよ？ 誰も、あたしを竜だと思っていない」

「鉄と火で森を焼き開く人間を、お前は快く思わないだろう。その心と、お前の力があれば、お前は立派な竜なのさ。不安がる必要など、どこにもないさね」

「けど……」

「——ウルスラ、よくお聞き。お前を生んだ番は、^{つがい}お前を見捨てて森に捨てた」

「私に取って食われるはずだったお前は、まだ小さいにも関わらず自分の置かれた状況を理解していたんだよ」

「一度死んだものを殺すことが出来るのは神様ぐらいのもの。そして、お前の振るう剣は私たち竜はおるか、神様でさえ切り裂く力がある。負ける筈が無いのさ」

横たわっている。

自分の体が、床に転がっている。柔らかいヒトの寝床に、竜たる自分が寝転がっている。

まだ意識の焦点が合わないまま、ウルスラは考えを逡巡させていく。あの男に逃がされて、背中をギルドの連中に撃たれて、その後よく分からない男に抱きかかえられて、その途中で気を失った。

夢だったのか。そんな気休めも、背中にまだ残る痛みで掻き消える。傷口には手当のために巻かれた包帯と膏藥の匂いがあり、寝床

のすぐ横には彼女が無二の信頼を寄せる竜殺しの剣が置かれていた。そして剣の傍らにあるのは、彼女を抱えていた男の顔だった。

「……ん、ああ。目が覚めたのか」

腕を組みうつらうつらとしていた男が視線を上げる。

細面に浮かべる笑みは優しげで、血を見たこともないような印象を受ける。だが、魔物が多く潜むあの森を一人で歩くほどだ。その腕前は想像に難くない。事実、腕利きとも思えないが追手の二人を容易くあしらったのだから。

「見たところ、まあ人の子ではないだろう。あんな立派な剣の使い主でもあるしね」

「立派な剣……？」

傍らの剣に一瞬だけ目を流し、男はその顔をウルスラに向ける。

「——問おう。君の背中を射掛けた男が竜の姫君だと君を呼んでいた、それは本当かい？」

笑みはあくまで崩さぬまま、だが言いよのない威圧感を纏った男がウルスラに問いかける。揺れる金髪の奥に覗く双眸からは、底の見えない蒼があつた。

ウルスラにとって、人間というのは刈り取るだけのものだった。

弓を引こうと剣を振るおうと、それは無力な抗いでしかない。大地の守護者たる竜に楯突く、愚かな生き物でしかない。

だが、今のウルスラにこの男を振り払うだけの力はない。体さえ動けば剣を奪い返し、すぐにでも出ていける。だが、この体ではそれさえできない。この男の問いかけを聞き続ける他にすることもない。

「……人間はそう呼ぶわ。もう随分、飽きるほど聞かされた名前」

「言葉を解せず、ただ人間を遊ぶように殺すというのが光皇国を始めとした各国の竜の姫君に対する考え方だと取ってもらっていいと思う。だが、君はこうして僕と会話も出来ている。ただの下らない噂が独り歩きしていただけの話だ」

言って男は椅子の背もたれに体を預けた。品定めをするような感

情のない目が寢床に横たわる彼女の身体に注がれる。

腹の底にこみあげてきた不愉快な気持ちに従い、ウルスラは寢床から立ち上がる。足がまだ思うようには動かないが、他愛ない冒険者程度であれば全く問題はないだろう。

「傷は浅くなかったが、不思議とほとんどふさがっている。どうやら大地の加護を、皇国の人間よりも受けているらしい」

「鉄で森を切り開き、炎で森を焼き払うお前ら人間より大地の加護を受けるのは当然だと思うけど？」

「違う、と男は笑いもしない。

「本来ならば守護者たる竜をこのように討とうとすることこそ大本から筋を違えている。豊穣に恵まれた大地をわざわざ汚すような真似をする奴らの気がしれないね」

肩をすくめた男は、すつと立ち上がり天幕を後にする。相対するのが竜の姫君だと知って背中を見せるといふ愚かしいにもほどがある。自信の表れなのか、それとも単にこの男が本当に愚かなだけなのか。

五体の感覚は万全にはほど遠いものの、剣を振るう程度には戻ってきている。立てかけられた剣を取り、あの男を真つ二つにするのに半秒もかからないだろう。

寝台から身を跳ね上げる。

布の翻る派手な音が響くより速く巨剣の柄を片手で握り、渾身の膂力をもって男の脳天へと振り下ろした。

だが、

「——そうそう、僕を簡単に殺せるとは思わないことだ」

「ッ!？」

青白い光が閃き、袈裟切りを弾き返す。

二度目だ。かつて、これほど短い間に二回も自らの剣撃を止められた記憶などない。

驚愕に歪むウルスラを見て、笑みは崩さず男は言う。

「人間というのは何分弱い生き物だね。だからこうやって外からの

力に抗う術を持たなければ、生きることなんて出来やしない。――
結界という奴だ、これを抜けられるようになれば体も元の程度まで
回復することだろう。それまではゆっくり養生することだ。いいね
？」

人差し指でウルスラの額を軽く突いた男は部屋を出ようと歩みを
進めるが、そうそう、と忘れていたように振り返り、

「エルンスト、通りすがりの魔術師だ。……逃亡中の、ね」

邂逅 - c - (後書き)

月日が経つのは早いもので。 e s tでございます。
ぼちぼち更新していきたいものです。

後ろ手に扉を閉め、青年は苦笑を浮かべた。

いかに龍の姫君であろうとも手負いであれば弱い少女と何も変わらない。しかも、大粒のオニキスを埋め込んだような黒の瞳と絹を思わせる滑らかな黒髪は、どこことなく気品さえ感じさせる。

そして、その可憐な少女とはまるでかけ離れた、龍殺しの巨剣。

昔話や神話に登場する類の、人の手には到底負えない代物だ。

ザイフルト。列聖された龍殺しの英雄が、同じ名の剣を使っていた。また、英雄その人の呼び名の一つでもある。静寂たる刃の美しさとは裏腹に、無尽蔵に周囲の魔力を収束し、指向性を持たせて自在に解放させることが出来る神格兵装。その一振りで、地図を書き換えることさえあったと言われる聖剣である。

あの剣の真贋はともかくとして、見事な意匠と冗談のような大きさ、その大きさに相応しい超重量。そして、その巨剣をまだ毒が抜けきっていないにも関わらず容易く振り抜いた少女の臂力。然るべき師の下で教えを受けていたなら大陸に名を轟かせる剣士となっていたに違いない。

……惜しいな。

それはエルンストの本心であつた。しかし、師の無い剣の使い手であれどもこれまで多くの冒険者を屠ってきたのは事実。六大国に属する魔術師であるならば、彼女を保護するという選択肢はない。あるのはただ一つ、彼女を生死問わずに捕えることである。両手両足に不動結界を応用した拘束でもしてギルドに突き出せば一生遊んで暮らせるだけの金と大陸の安寧に大きく寄与した魔術師としての栄誉、そして自分が属する組織の中でも更に上の階梯へと進むことが可能となる。

尾を相食む蛇の名を持つこの世界——アウロボロスの六大国は、六つそれぞれの国土が長らく不可侵を保っていた。だが、その不可

侵の歴史を打ち壊した国家があった。

龍をその国家の紋章に刻む大陸最大の軍事力と経済規模を持つ白の国、光皇国だ。先王の死によって即位した今の王が振るう辣腕とも言つべき内外への政策は、それまで他の国より劣つてさえた国力を向上させ、積極的な侵攻によって国土の拡大を推し進めている。その煽りを受けた黒の国、夜嬢国は徐々に力を衰えさせていた。このまま行けばそう遠くない先に光皇国は夜嬢国を併呑し、その勢いのまま進撃を進めていくだろう。

そうでなくとも国力の疲弊が著しい夜嬢国が光皇国の攻撃をまともに受ければ、簡単に瓦解することは想像に難くない。古くから外部からの交流を閉ざしていたため魔術や文化、技術などといったものの流通もなく、文化水準は他の五つの大国と比べても一世代前のものと考えるのが妥当だ。古くから国民同士の団結力の強さ、そして国王への忠誠心の強さでは他の国を優に超えるものであったが、今の時代ではそれが仇となった。

しかし、光皇国がまだ具体的な侵攻に着手していないのには一つの原因があった。均衡の守護者と呼ばれる、どの国家にも属しない魔術師たちの存在である。

六つの大国がその形を持つようになったその時から今に至るまで続く、六つの大国それぞれをそのままの形で維持させる事を目的として活動する魔術結社。エルンストもまた、均衡の守護者に属する魔術師の一人として数度の紛争に介入していた。六大国それぞれに存在する魔術学院にて高度な魔術を修め、冒険者として功績を上げた者のみが所属を許される知られることのない存在だ。国家間の紛争行為に割って入るという行動指針である以上、自分の身を守るのに加え大多数の相手をする事が出来る魔術を習得し、それを手足のように自在に動かさなければ命がいくらあつたとしても足りない仕事である。

守護者というのは大抵が情感と折り合いがつかなかったり何らかの理由で軍籍から解かれた生粋の戦闘魔術師か、冒険をしていく内

にいつの間にか勧誘を受けてそのまま落ち着いたという二通りの型が存在する。エルンストの場合は後者で、もとは炎鳳国の商人の子であったのが今では国家間の力の均衡を保つという大それたことをする魔術師となっていた。

国家間の均衡を保つという仕事をする以上、六つの国家がどのような状態であるかというのは当然情報として知ることがもちろん、自らの目でその状況を実際に確かめることが肝要である。それが守護者となる際に受けた教えの一つで、エルンスト自身そのことをよく熟知していた。事実として、光皇国の国民から崇拜される救国の英雄が、今では王に避けられ、それを耳にした他国が英雄の囲い込みを始めているというのだ。

名はハンス・フィリップ・フォン・グナイゼナウ。大規模な内乱を数度経験し、その乱ごとに耳を疑うような武功を打ち立て、今は光皇国の護国鎮府卿という筋金入りの英雄である。まだ統一が完全でなかった光皇国の主たる軍事行動の多くに参加し、血の河と屍の山を幾つも築いてきたという。

だが、そのような血生臭い話よりも皇国を救った英雄をして、今でも国民からの崇拜は篤い。事実、光皇国では『グナイゼナウ卿のようになれない』という一言が魔術師を目指す子供に使う慣用句になっている。もしも彼が侵攻の尖兵となるならば、いかに連環を成す大国であろうとも無事には済むまい。光皇国の現王との確執が噂されているが、国家への忠誠心の篤さで知られる男が叛逆などといった真似に出るはずもないだろう。

そして、光皇国にとって近年最大の障害となっていた 龍の姫君 その人が、今はこうして手傷を負っている。見てくれこそは可憐な少女であるものの、纏う威風はやはり六大国が警戒するのも頷ける。さすがに五体満足な彼女を相手にして、無傷で勝つのは不可能に近い。

「守護者様が考え事か。龍の姫君を手懐けようってか？」
軽い男の声にエルンストは肩をすくめ、

「犬なら噛まれても痛いので済むが、龍相手だと食い殺されるのが目に見えてるさ」

「はははっ、違えねえな！　で、どんな化け物だったんだ？　もう、こつ鬼だとかオークだとかとのハーフでもうそれはごっつい……」

「なんかお前の想像がどういう方向に向いてるのかはこの際問わないが、人間のかわいい女の子だぞ？」

何！？　という声と同時に、すとん、という音で表れた姿があった。狼の耳と発達した犬歯、そして浅黒い肌の青年だ。なめし皮の軽

鎧と腰に携えた四本の短剣がかちゃかちゃと音を鳴らす。

「マジか？　マジでか！？　マジなのか！？　俺ら人狼を鼻であしらうあの　龍の姫君　が、　か　わ　い　い　女　の　子　だ　と　！
？」

一人で盛り上がりの佳境を迎えた人狼の青年の額を、エルンストは人差し指で軽く小突いた。

軽い溜息と、

「何なら見てくればいいさ。ヴィド、その代りと言っちゃ何だけど命の保証はできないよ？　僕の結界を一層とは言え破っているからね、当たれば挽肉になること請け合ひさ」

皮肉を口に、軽く笑う。

ヴィド、と呼ばれた人狼の青年は下を見つめ静かになる。直後、顔色を変えてエルンストに詰め寄った。

「おい待て、お前の結界を破ったのか！？　俺が三日かけてヒビ一つ入れられなかったあのクソかてえ結界を！？」

「そう、しかも咄嗟のこととは言え、割と本気で編み上げた法術だった。それこそ、巨龍を閉じ込める時に編む結び方と同じだったんだけだね。おかげでこのザマさ」

エルンストがゆったりとした右の袖をめくり上げると、そこには真新しい焼き鏝を押し付けられたような火傷が幾つも浮かんでいた。文字を幾何学的な記号にしたような印が、白い肌にまざまざと記しこまれている。強力な魔術を破られた際に行使者に刻まれる反発刻

印だ。

「あの怪我でこの力だ、龍殺しそのもので間違いない。神話の通りだと考えれば一振りで山一つを抉るってシロモノだ、結界で防ぐことが出来て運が良かったよ」

背中から袈裟切りを浴びせかけられた時に放たれた結界の反動だった。十分な詠唱を元に構築された結界であればマナを魔術師を完全に切り離して展開できるため、破られても反動はないが、咄嗟にしかも大出力の結界を展開すれば結界を構築するマナが魔術師と直結した状態にならざるを得ない。もしその状態で結界が破られれば、破られた際の反動がすべてではないにしろ術者に襲い掛かる。だからこそ、生粋の魔術師という生き物は戦闘よりも戦闘の準備にその技術を費やすのだ。

反面、少女は魔術らしい魔術を行使することもなく結界を叩き割った。単純に、膂力と巨剣の超重量が生み出す破壊力のみで、だ。それがどれほど馬鹿げた話なのかは、結界を操るエルンスト自身がよく思い知っていた。

……雷でも落ちたみたいな一撃だったな。

手負いであれほどの威力だったのだ。龍の姫君の名は、伊達ではない。

「くれぐれも部屋に潜り込まないようにね。本調子になる前に、僕ももう一度あの子の周りの結界を新調しないと。そのうち破ってこっちに向かってきてもおかしくないからさ」

手をひらひらとさせて笑みを浮かべながら、エルンストは自らの部屋に戻っていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3359/>

アウロボロス -円環大地交響詩-

2011年11月29日17時53分発行